

AI開発の外注先を、 どう選ぶか。

受託開発会社との付き合い方と、契約前に確かめること

この資料で分かること

- 受託開発・伴走型・ノーコードの向き不向き
- 提案書のどこを見れば実力が分かるか
- 契約前に決めておくべき取り決め
- 「安い」が後で困る」発注のパターン
- 外注しながら社内にノウハウを残す方法

オブティソース株式会社 / 2026年版

AI開発を外に頼むとき、多くの会社が**実績の数と金額だけで選んでしまいます**。ところが実際に差が出るのは、要件が固まっていない段階での関わり方と、作ったあとに誰が面倒を見るかです。この資料は、提案書と契約書のどこを見れば**あとで困らない相手か判断できるか**を整理します。

外注の失敗は「決まっていないもの」の押し付け合いで起きる

揉める案件のほとんどは、技術力ではなく前提の共有不足が原因です。発注側は言わなくても分かるはずと考え、受注側は書いていないので範囲外と考えます。要件が固まりきっていないのは普通のことなので、固まっていないことを前提にした進め方を選ぶかどうか、相手を見極める分かれ目になります。

実績の数より、断ってくれるかどうか

良い相手ほど「その範囲なら作らないほうがよい」「既製のツールで足ります」と言います。何を聞いてもできずと答える会社は、要件を整理していないか、作ってから考えようとしています。最初の打ち合わせでの断り方を見てください。

01

前提を整理するか

要件が曖昧な段階で、何を決めるべきかを一緒に洗い出してくれるか。ここで実力の差が出ます。

02

小さく始められるか

いきなり全体の見積もりではなく、1業務から試す進め方を提案できるか。

03

運用まで見るか

納品して終わりか、半年後の改善まで並走するか。契約書の対応期間に表れます。

頼み方は5つある。どれを選ぶか

頼み方	向いている場面	気をつけること
受託開発（一括）	作るのが完全に決まっていて、変更の見込みが小さい	途中の仕様変更に追加費用がかかる
準委任・伴走型	やりたいことは明確だが、詳細はこれから決めたい	時間で課金されるため範囲の管理が必要
ノーコード＋支援	既製ツールの組み合わせで足りる業務	複雑な処理は途中で頭打ちになる
社内＋部分外注	社内に業務を言語化できる人がいる	指示する側の負担が増える
丸ごと任せる	社内にIT担当がいない	運用も依存するため、乗り換えが難しくなる

契約前に確かめる8項目

- ✓ 要件が変わったときの扱い

変更のたびに再見積もりか、一定の範囲は含むのか。
- ✓ ソースコードの権利

自社に帰属するか。持てないと他社に引き継げません。
- ✓ 誰が実際に作るのか

提案者と作業者が別なら、担当者の経験を確認します。
- ✓ 運用の引き継ぎ

自社で運用できる状態で渡すのか、任せ続けるのか。
- ✓ 進め方の刻み

月1回の報告か、週ごとに動くものを見せてもらえるか。
- ✓ AI利用料の契約

自社名義か。開発会社の名義だと解約時に止まります。
- ✓ 受け入れの基準

何をもって完成とするか。曖昧だと検収で揉めます。
- ✓ 撤退の条件

途中でやめる場合の精算方法を先に決めておきます。

小さく発注して試す

いきなり本番規模で契約せず、1業務で相性を確かめてから広げます。

要件は自社で持つ

整理を手伝ってもらっても、決めるのは自社。ここを渡すと主導権を失います。

運用を見据えて選ぶ

作って終わりではありません。半年後に相談できる相手かで選びます。

社内に分かる人を置く

全部任せると、次に頼むときも比較できなくなります。

外注は「作る力」より「一緒に決められるか」で選びます。最初の打ち合わせで前提を整理してくれる相手なら、その後の変更にも耐えます。当社は要件整理からご一緒に、**自社で運用できる状態**でお渡しすることを基本にしています。

相談は無料です

現状を伺ったうえで、やらない方がよい場合はその理由をお伝えします。／ optisource.co.jp

オブティソース株式会社 / AI開発の外注

P. 02 / 02